

■ 学校の共通目標

授業づくり	重 点	○基礎学習の時間の確保や指導内容の特性に合わせた工夫により基礎学力の定着を目指すとともに、活用力を高めることで深い学びにつなげる。	中 間 評 価	○短時間学習時に学習内容の習熟に取り組んだ。デジタルコンテンツを活用した授業づくりが課題である。	最 終 評 価	○各種学力調査からは、学力定着に向けた一定の成果をみてとれる。今後も OJT による授業力向上に組織的に取り組む。
環境づくり		○視覚的に理解しやすい掲示や学習規律を全校で共有し、様々な背景をもつ児童も学びやすい学習環境を整えていく。		○環境整備を通して区の UD の考え方が浸透しつつある。学力調査等の結果から一層の改善に励む。		○UD に基づいた環境整備を目指す中で、特別な支援を要する児童への指導について再考する機会をもつことができた。

■ 学年の取組み内容

学年	教科	学習状況の分析 (10月)	課 題 (10月)	改善のための取組み (10月)	最終評価 (2月)
1	国語	<p>学 声に出して文字を読むことを好む児童が多く、音読する力が着実に身に付いてきている。</p> <p>学 字形に気を付けて平仮名を書くことに取り組んできたため、9割の児童が正しく書けるようになっていく。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・100文字程度の文章を書くことができる児童は全体の4割程度である。 ・新出漢字の書き順や字形を正しく覚えていない児童が半数近くいるため、反復練習の必要性を感じる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・週に一時間、日記を書く時間を設けたり、作文指導を毎月行ったりすることで、文章を書く力を伸ばす。 ・反復練習を行う他、小テストを隔週で導入することで、新出漢字の定着を図る。 	<p>学 作文指導を行ってきたことで、100文字程度の文を書くことができる児童が増えた。2割程度の児童は、100文字には満たないものの、文章を書くことに対して意欲的に取り組んでいる。</p> <p>学 小テストを通して新出漢字の定着を図ってきたが、3割の児童は正しい漢字を書くことに困難を感じている。引き続き指導を行っていく。</p>
	算数	<p>学 繰り上がりのない一桁の足し算は3分間に40問、繰り下がりのない一桁の引き算は3分間に30問解くことができる児童が全体の6割程度である。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の力で文章問題を読み、立式することが困難である児童が4割程度いる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・文章問題に数多く取り組み、ポイントとなる「あわせていくつ」「残りはいくつ」といった言葉に着目しながら立式をする習慣を身に付けさせる。 	<p>学 繰り上がりのある足し算を3分間に40問正しく解くことができる児童が9割に増えた。一方で、繰り下がりのある引き算は、児童の半数が3分間に20問解くことができる程度であり、指導の継続が必要である。</p> <p>学 9割の児童は、ポイントとなる言葉に着目しながら自分の力で文章問題を読み、立式することができるようになった。</p>

学年	教科	学習状況の分析 (4月)	課 題 (4月)	改善のための取組み (4月)	中間評価・追加する取組み (10月)	最終評価 (2月)
2	国語	<p>調 国語への関心・意欲が高い児童が多い。</p> <p>調 読むことについては、個人差が大きく、スラスラと抑揚をつけて読むことができる児童がいる反面、たどたどしい読み方になってしまう児童もいる。</p> <p>学 書くことを苦手としている児童が多い。</p> <p>学 相手を意識して声の大きさに気を付けて話せる児童が多い。</p> <p>学 聞くことについてはこれからまだ指導が必要である。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・語彙が少なくたどたどしい読み方になってしまう児童が見られる。 ・文章構成や表現の仕方がわからず、なかなか書き出すことができない児童がいる。 ・相手を意識した声の大きさと話すことに課題がある。 ・話の中で大切な部分を落とさずに聞くことに課題がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・語のまとまりに注意して読むようにする。国語への意欲が高いことを生かして語彙の拡充を図る。 ・書くことに慣れるよう、視写を日常的に取り入れる。 ・相手を意識した話し方や口形について指導する。 ・連絡帳を聴写することで、大切なことを落とさずに聞くことができるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・新しい言葉を学ぶ際には、文字の構成に着目させたり漢字のもつ意味を理解させたりした。児童から出された使用場面を共有することで語彙力が高まりが見られた。 ・声のものとさしを活用したり、口角を意識した話し方をさせたりすることについて指導をしている。場に応じた声の大きさを使い分けられることのできる児童が増えた。 ・視写や聴写に取り組むことで、書くスピードが上がった。 	<p>調 文字の構成に着目させたり漢字のもつ意味を理解させたりした結果、語彙の拡充が見られた。学力調査においても、漢字の読み書きは95%を超える児童が正答している。</p> <p>学 聞き手を意識して話をするのは上手にできるようになったが、聞くことについては課題が見られる。大切なことを落とさずに話を聞くことができるよう、指導を続けることが必要である。</p>
	算数	<p>調 算数への関心・意欲が高い児童が多い。</p> <p>学 個人差が大きく、すらすらと計算をする児童がいる反面、指を使って計算をする児童もいる。</p> <p>学 単元の終わりに理解できていたことが、時間が経つと解き方が曖昧になり、教師による支援が必要な児童がいる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・指を使わずに計算ができない児童がいる。 ・単元の終わりに理解できていたことが、時間が経つと解き方が曖昧になり、教師による支援が必要な児童がいる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ベーシックドリルを活用し、既習事項の理解が定着するようにする。特に、繰り上がり・繰り下がり計算問題を行う。 ・日々の宿題で既習事項の復習を行う。宿題の中には現在学習しているものの他、以前の単元に関するものも含める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・繰り上がりや繰り下がりについては、問題を解く場面で間違いが減っており、だんだんと技能が身に付いてきている。しかし、繰り上がりや繰り下がりを含む計算の習熟については課題がある。 ・宿題やベーシックタイムなどの時間を活用し、授業以外の場面でも、技能の定着を図る。 	<p>調 区の学力調査において、基礎的な知識を問う問題の正答率は高かったが、活用問題の正答率は区の平均をやや下回った。考えを共有する場面においては、一通りの考え方を説明して終えるのではなく、多様な解き方を伝え合えるようにする。</p> <p>学 ベーシックタイムでは、基礎問題に取り組むことで既習事項の理解が定着した。今後は応用問題にも取り組み、理解がより深められるようにする。</p>
3	国語	<p>調 関心・意欲が高い児童が多いが、「書くこと」について全国平均値に届いていない。また、作文に苦手意識を持つ児童が多い。</p> <p>学 既習漢字を、読んだり書いたりすることができる児童が多い。</p> <p>調 「読む力」は、区の平均を下回っている。読むことに意欲的な児童が多いが、個人差がある。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・「書くこと」について、自分の考えを作文して表現することに課題が見られる。 ・「読む力」については、場面の様子を読み取ることや言葉の特徴やきまりについて理解することに課題が見られる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・作文の構成を提示することで、自分の考えを書き表すことに焦点化して書くことができるようにする。 ・音読の練習を継続して行ったり、文章の言葉や表現について学級で話し合ったり、辞書を活用したりして、自ら学ぶ力をつけられるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・作文の書き方が明確になるよう、作文の組み立て方を提示したことで、文を書くことへの意欲が高まった。互いに読んで良いところを伝える場をつくり、読み手にとって分かりやすい文章を書くことを意識させていく。 ・新出漢字の書き取りを繰り返し復習する機会をつくり、定着を図る。 ・音読の練習を繰り返し行うとともに、内容について話し合う活動を取り入れることで、文章の内容についての理解を深められるようにする。 	<p>学 作文を書くことに対する苦手意識が薄れ、取りかかりが早くなるとともに、読み返す習慣がついた。また、ICT機器を使って資料を掲示し、発表する機会を設けたことで、聞き手に分かりやすく伝えようとする意識も育ってきた。</p> <p>調 新出漢字の復習を繰り返した結果、区の学力調査において、漢字の読み書きは区の平均正答率を上回った。</p> <p>調 物語の内容についての話し合い活動を取り入れたことで、読み取りでは、区の学力調査において区の平均正答率を上回ることができた。</p>

	算数	<p>調正しく計算をするなど基礎的な部分は区の平均値に近づいているが、「数学的な考え方」「活用」の面で大きく区の平均値を下回っている。</p> <p>学（ ）を用いた式の理解がやや不十分な児童がいる。</p> <p>学ほとんどの児童が、九九を使って素早く計算することができる。</p> <p>調個人差が大きく、時間が経つと学習の理解が不十分になる児童がいる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 計算ができて、計算の仕方を図や言葉で説明するなど、自分の考えを表現することに課題が見られる。 かけ算の問題を正しく立式することに課題が見られる。 1 mや1 L がどれくらいなのかという量感が育っていない。 	<ul style="list-style-type: none"> 日々のベーシックタイムでの復習や家庭学習を通して、文章問題の指導を継続的に行っていく。ICT 機器を活用して文章問題を図や言葉で表す機会を設けることで、論理的思考力や説明する力を育てる。 1 mものさしや1 L ますなどを教室に置き、長さやかさについて予想したり確かめたりする機会を多くする。 タイムチャレンジや計算ドリルの反復学習を通して、基礎的な内容を確実に定着させる。 	<ul style="list-style-type: none"> 文章問題の理解を苦手とする児童が多い。授業で児童が文章問題を図や言葉で表す場を設けるとともに、文章問題を家庭学習の課題に出し、習熟を図っていく。 重さやかさなどの学習では、はかりや升などの具体物を活用し、量感をもたせる。 ベーシックタイムでは東京ベーシックドリルや計算ドリルなどを用いて反復学習を行い基礎的な内容の定着を図る。 	<p>調ベーシックタイムや、家庭学習で毎日異なる計算問題に取り組みさせた結果、区の学力調査において、「数と計算」では区の平均正答率を上回った。</p> <p>調文章題で、図をかくことや図をもとに立式することを家庭学習で継続して取り組ませた。その結果、区の学力調査において、「数学的な考え方」「活用」の観点で、区の平均正答率に近づいた。</p> <p>学重さやかさなどの学習で具体物を活用するとともに、家庭学習の中で単位の変換の問題を継続的に取り組ませたことで、量感が身に付いてきた。ただ、図形に対する理解度には個人差が見られる。今後も家庭学習やベーシックタイムで復習の機会をつくっていく。</p>
4	国語	<p>調どの教科でも話し合い活動を積み重ねてきたことで、読む力がある。</p> <p>調書く能力は区の平均を下回っている。そこで、学ローマ字の読み書きが定着していない児童がみられる</p>	<ul style="list-style-type: none"> 物語文の感想を書いたり、自分の考えを書いたりすることに苦手意識をもつ児童が多く、課題が見られる。 ローマ字の学習から離れてしまうと忘れてしまい、定着していない。 	<ul style="list-style-type: none"> 国語に限らず、どの教科においても自分の考えを書く時間を設ける。文章の長さではなく、まずは考えていることを一言でも書けるようになることを目指す。 課題である推敲の仕方を丁寧に指導し、段落の構成や誤字脱字を確認する習慣をつけさせていく。 定期的にローマ字の宿題を出し、読みや書き、言葉づくりに取り組んで定着を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> 授業で考えを書く時間をこれまでより多く設定したことで、200 文字程度の短い文章であれば 90%程度の児童が書けるようになった。教師から、児童の書いた内容に対して価値付ける言葉かけを継続し、達成感をもたせることでさらに意欲を高めていく。 推敲の場面で、誤字脱字については自分で見直す時間を設ける必要がある。いちど声に出して読む等の指導を継続することで、自ら修正する力を身に付けさせる。 ローマ字の学習を定期的に行うために、曜日を決めて宿題に出したりベーシックタイムを活用したりする。 	<p>学年度当初と比べると、自分で読み返す習慣が身に付き、文章における誤字脱字が減少している。また、書くことに対する抵抗感も減少してきている。</p> <p>調学力調査の形式に慣れておらず、決められた時間内で作文を書くことに不慣れな様子が見られる。授業の中でも少しずつ形式に慣れていく機会を設定する必要がある。</p> <p>調漢字辞典の使い方が定着していない。授業の中で辞典を使って調べる時間を設定し、定着を図る必要がある。</p>
	算数	<p>調区の平均値に届いていない。特に図形の問題に力を入れて、コンパスや三角定規、分度器を活用していく力を身に付けさせる。</p> <p>学割り算の概念やかかけ算の筆算の仕方を忘れてしまう児童がいる。算数の時間の冒頭で行うタイムチャレンジに四則演算を取り入れることで、技能を伸ばす。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 定規、コンパス、三角定規、分度器を用いて活動することに時間がかかり、課題が見られる。 計算問題の解き方を忘れてしまう児童が多い。 	<ul style="list-style-type: none"> 器具を使って実際にはかる活動をたくさん取り入れていく。 算数の時間の冒頭でタイムチャレンジを行い、計算力を伸ばす。 宿題で計算ドリルに取り組み、直しまできちんと指導することで基礎基本の定着を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> 演習問題の振り返りを行い、習熟のサイクルを確立させることで計算技能の定着がみられてきた。 作図等の作業の時間を確保することで、器具を使用する技能を高めていく。 児童の実態に応じてタイムチャレンジの時間を設定することで、計算練習に対して意欲を持続していけるようにする。 	<p>調区の学力調査において、大きい数や概数について区の平均正答率に届いていない。日常生活でも活用される内容なので、使い慣れるために日常的に指導を継続する必要がある。</p> <p>調区の学力調査において、作図に用いる道具の使い方の習熟に課題が見られた。今後も作業の時間を確保していくことが必要である。</p> <p>学タイムチャレンジの時間を、実態に応じ加減して設定したことで計算に対する意欲は上がってきている。</p>
5	国語	<p>調文章を読み取る力が目標値を大きく上回っている。</p> <p>学まだまだ書くことに対して苦手意識がある。自分の書いたものを推敲するときのポイントを指導したり、児童がお互いの文章を読み合い、アドバイスする活動を行ったりするなどして、書くことに対する苦手意識を減らしていく。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 段落相互の関係を意識しながら文を書くことに課題が見られる。 書いた文章を読み返す習慣が身に付いていないため、誤字脱字が多い。 	<ul style="list-style-type: none"> 構成メモを活用することで、段落を意識した文章を書くことができるようにする。 書き終えたものを必ず読み返させることで、推敲をする習慣を身に付けられるようにする。 友達同士で作文を読み合う時間を設け、お互いの良さについて伝え合わせる活動を多く取り入れることで、書く活動に対する苦手意識を減らせるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> 教科書で学んだことをもとに構成メモを書いた。そのことで段落相互の関係を考えながら文章を書けるようになってきた。 推敲するポイントを指導したことで、それを意識して読み返すようになってきており、誤字脱字が減っている。 お互いの文章の良さを伝え合う活動の時間を十分に確保できなかった。今後、時間を確保していく。 	<p>調自力解決ができるよう文章の読み取り方や表現の仕方を継続して指導したことで、区の学力調査においては目標値を大きく上回ることができた。</p> <p>学書くことに対しての苦手意識を軽減することができた。自分の書いたものを推敲するときのポイントを指導したり、児童がお互いの文章を読み合っってアドバイスし合う活動を取り入れたことが有効であったので、今後も続けていく。</p>
	算数	<p>調基本的な学力があり、基礎・基本は身に付いている。</p> <p>調児童の考えを伝え合い、考えを深めることができるまた、児童が ICT 機器を使って発表したり、作業を見せたりする活動を取り入れたことで、視覚的にも理解を深めることができる。</p> <p>学図形についての技能には課題が見られる。図形の性質を、具体物を使って理解したり、いろいろな描き方を児童同士で伝え合ったりして、理解を深めていく。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 授業の中では理解できているが、定着はしていないため、時間が経つと解くことができなくなってしまう児童が数名いる。 タイムチャレンジを継続的に行うことで四則演算を解く力は身に付いているが、発展的・応用的な数学的考え方は養われていない。 図形の描き方や長さ、重さなどの量感が育っていない児童が多数いる。 	<ul style="list-style-type: none"> 理解が遅い・不足している児童に関して、個別に指導するのはもちろん、毎日の宿題で、既習事項の内容を取り入れた問題を繰り返し出すことで定着を図る。 毎授業の中で基礎・基本をもとにして解く応用問題を1・2問用意し継続的に取り組みせ、数学的思考力を培う。 量感を持たせるために、実測・実体験をさせる活動を充実させていく。また、ICT 機器を使い、図形をより深く理解できるようにしていく。 	<ul style="list-style-type: none"> 毎日の宿題で、今まで習った問題に繰り返し取り組んだことで、学力調査では、基礎問題の正答率が高くなった。 少人数に分かれての授業では、各グループの理解度に応じた活動や課題に取り組ませていく。 図形を扱う単元では、ICT 機器を使用することで、理解を深めることができた。今後もより効果的に機器を使用するとともに、児童による利用も進めていく。 	<p>調宿題での繰り返しの学習により、基礎的な学力が身に付き、区の学力調査においては基礎の部分での正答率が目標値を大きく上回った。</p> <p>調考えを伝え合う活動を多く取り入れたことで、考えをより深めることにつながり、活用する力が高まった。また、児童が ICT 機器を使って発表したり、作業を見せたりする活動を取り入れたことで、視覚的にも理解を深めることができ、区の学力調査においては活用の部分での正答率が目標値を上回った。</p> <p>学作図についての技能には個人差が見られる。今後も図形の性質を、身近な物を使って説明をし合ったり、その性質を利用した図形のかき方を児童同士で伝え合ったりして、理解を深めていく。</p>

6	国語	<p>調意識調査より、学習に興味をもち進んで学ぼうとする意欲が高いことがうかがえる。自分で課題を立て、問題を解決していく活動を多く取り入れていく。</p> <p>調段落を分けた構成をつかむことや、意見と理由を区別して書くことが苦手な児童が多い。国語の読解や調べ学習などを通し、継続指導していくことで書く力を伸ばしていく。</p> <p>学感じたことを言葉や文章にするのが苦手な傾向がある。読書活動を含め語彙の幅を広げる。根拠を基にした自分の考えを詳しく伝えるための活動を継続して行う。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 文の構成の理解が不十分である児童が多い。文末表現が一致しないことと主述の関係をつかむことが難しい、助詞を正しく使えないなどの課題がある。 感じたことを言葉や文章にするのが苦手な傾向があり、短絡的な感想に終始してしまう。 	<ul style="list-style-type: none"> 文の書き方や、書く視点を適宜示し、構造的な文章を書く機会を多く設ける。 自分の考えや思いを具体的に表す視点を示すことで、根拠を明らかにした文章が書けるように指導していく。 読書活動等による語彙の習得、調べ学習等による文章力の習得を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> 授業の終わりに学習の振り返りを書いたり、ワークシートを活用して構成を考えてから文章を書いたりした。それにより、自分の考えを具体的に分かりやすく書く力が付いてきている。 学習課題に沿った資料や情報の収集・選択することはできるようになっているが、自分の考えの根拠に結びつけることには課題がある。 学校図書を活用し、読書の時間を確保して語彙を広めている。 	<p>調自分で課題を立て、問題を解決していく活動を多く取り入れた。児童の意欲的な学習につながり、区の学力調査において、教科全体の正答率は目標値を上回った。</p> <p>調国語の読解では、文の構造や論理展開を繰り返し指導し、児童に十分意識させた。書く活動を多く取り入れたが、依然として意見と理由を区別して書くことが苦手な児童が多い。</p> <p>学読書時間に加え、読み聞かせの時間も確保し、読書活動の充実を図った。卒業文集を書く際、書くことが苦手な児童には、型を示したことによってスムーズに書き進めることができていた。自分の考えを、根拠を明らかにして書けるようになってきた。</p>
	算数	<p>調教科全体としては目標値を上回り、課題であった図形でも改善が見られた。毎時間ノートを確認し振り返りを徹底した成果と言える。</p> <p>調正答率の分布から、やや2極化の傾向がみられる。少人数や個別指導などで個々に対応する指導の工夫をしていく。</p> <p>学毎時間の基礎的な計算練習の伸びや授業中の発言など、できるようになったことを具体的に褒めることで、算数に対する関心を高めるようにする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 算数に対して苦手意識をもつ児童は、自力解決をすることに課題がある。 基礎的・基本的な計算を正確かつ迅速にできない児童が多い。 計算方法や公式についての理解はあるが、なぜその公式が使われるかといった数学的な考え方に課題がある。 	<ul style="list-style-type: none"> 習熟プリントを活用し、基礎基本の徹底を図り、できるようになった、という経験を積ませる。 日々の学習に加え、家庭学習等でも計算練習をする機会を多く設ける。誤りは必ず直すことを徹底する。 公式は帰納的なものであることを十分理解させ、結論に終始するのではなく、なぜこのような公式が導かれたのか、算数的視点で指導する。 	<ul style="list-style-type: none"> 習熟プリントに取り組ませた結果、基本問題に関しては、自力解決できる児童が増えている。 タイムチャレンジや計算問題の宿題を継続した結果、基本的な四則計算には成果が見られた。しかし、小数点を含む3口の計算のような、複数回の計算が必要な問題では間違いが多い。計算を確かめる習慣付けをする。 公式の理解に関しては個人差がある。習熟度によって課題を変えるなど、児童の実態に合わせた指導を進める。 	<p>調年間を通して、ノート指導を行い、振り返りを徹底させた。教科全体として正答率が目標値を上回った。しかし、計算と図形については、正答率が目標値より下回った。計算力の低さが課題である。</p> <p>調習熟度別指導や個別指導など、個々の実態に応じた指導の工夫をした。しかし、未だ正答率の分布をみると、2極化の傾向がみられる。学習習慣が確立していないことも原因の一つと考える。</p> <p>学できたことを具体的に褒めたことで、算数に対する関心が高まり、意欲的な学習につながった。</p>
音楽	<p>学リズムリレーを導入で行っているが、拍節感が十分でない児童が見受けられる。</p> <p>学歌や楽器を演奏する事は概ね出来ているが、曲を通して得た知識を他領域やグループ活動での表現に生かしたり思いを音につなげて演奏したりする児童は少ない。</p>	<ul style="list-style-type: none"> リズムは理解していても拍の流れによって演奏する事が難しく更に拍の速度が速くなると演奏出来ない児童もいる。 自分の気持ちや音楽の様子を的確に言葉で表せない児童が多く、思いを持って音楽につなげて表現出来ない児童がいる。 	<ul style="list-style-type: none"> 拍を感じやすいように一定の速度で拍を取りながら比較的演奏しやすいリズムカードから曲に出てくる頻度が高いリズムを取り入れた難度の高いリズムカードを織り交ぜて拍節感を養っていく。 音楽の基礎である拍を体得させつつ表現や鑑賞で音楽の雰囲気をつかみ気持ちと連動させた表現にしていきたい。 題材で学ぶ音楽の言葉を教室後方に掲示し学習で取り扱う際に適宜伝えていく。校内共通のハンドサインを用いて意見を出させ学びやすい雰囲気をつくっていく。 	<ul style="list-style-type: none"> メトロノームを使用し、拍を一定に保つことで拍の流れによってリズムリレーを行う事が出来る児童が増えてきた。特に1年生は1拍目が休符のリズムにも慣れ、細かいリズムにも挑戦しているため今後も指導を継続する。 教室後方に掲示している共通事項の言葉やハンドサインを用いて自分の思いを表現しようとする児童が増えてきた。今後も受容的態度で指導を継続していく。 	<ul style="list-style-type: none"> 1年生は、1拍目が休符のリズムにも慣れて、細かいリズムも拍の流れによって演奏出来る児童が増えた。1人で演奏出来る児童が増えたので複数人で演奏する事も実施している。人と合わせて拍の流れによって演奏する事を今後も取り入れていく。 特に鑑賞において教室後方に掲示している共通事項の要素に気づき、楽曲の特徴をハンドサインで知らせる児童が増えた。今後、領域を超えて共通事項の言葉を活用し自分の思いを音で表現できる児童を育てていく。 	
図工	<p>学学習のための用具がそろわない児童がいる。</p> <p>学豊かなイメージを持てる児童が多いが、表現する方法の選択で迷う児童もいる。</p> <p>学作業の手順として、自分が次に何をやっていいかわからなくなってしまう児童がいる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 学習道具を揃える習慣が身につけていない。 様々な体験が不足して児童がいる。また、体験していてもそれを授業に生かし切れていない児童がいる。 	<ul style="list-style-type: none"> 担任と密に連絡を取り、学習に集中できるように道具を揃えられるようにしていく。 表現の幅を広げるために様々な作例を示したり、色々な技法を習得させたりする。 図工室の環境を整え、児童が集中できるようにしていく。 分かりやすい板書の工夫をし、子ども達が見通しを立てて取り組めるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> 学習道具が揃えられる児童が増えてきた。今後は、どうしたら忘れずに自分で揃えられるか、個々で考えさせていく。 自分の使いたい道具の場所が、すぐに分かるように揃えたことによって、考えることに集中できるようになった。 授業の流れを板書しておくことによって自分がどこをやっているのか、これから何をやればよいのか、迷う児童がいなくなった。 	<ul style="list-style-type: none"> 学習の道具が揃えられるようになってきたことによって、作品作りに集中して取り組める児童が増えた。 毎回、授業の流れを板書したことによって、子ども達も流れが分からないときには、板書を見るようになってきている。 鑑賞に ICT を活用することによって、ただ作品を見せるだけでなく、よりおもしろくきれいに見せる工夫をするようになってきた。 	
特支						

調…新宿区学力定着度調査の結果から見える学習状況

学…授業での様子や提出物、作品、ワークテスト等から見える学習の状況